

博士学位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

令和6年5月

長岡造形大学

はしがき

本書は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規定による公表を目的として、令和6年3月15日に本学において博士の学位を授与した以下の者の論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位の種類	学位記番号	氏名	論文題目
博士（造形）	甲第6号	南雲 まき	院内学級における美術教育実践の現象学的研究 —病気や障害と向き合う子どもたちの美術制作をめぐる探究に並走して

氏名	南雲 まき
学位の種類	博士（造形）
学位記番号	甲第6号
学位授与年月日	令和6年3月15日
学位授与の条件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	院内学級における美術教育実践の現象学的研究 —病気や障害と向き合う子どもたちの美術制作 をめぐる探究に並走して
論文審査委員	主査 渡邊 誠介 長岡造形大学教授 副査 北 雄介 長岡造形大学准教授 副査 小松 佳代子 長岡造形大学教授 副査 池田 吏志 広島大学准教授

論文内容の要旨

本論文は、絵画と版画制作を行うアーティストであり、美術教育の実践者であり、研究者である立場から自身が勤務した院内学級における美術教育実践を省察し、院内学級で学ぶ病気や障害の重い子どもたちの美術制作の内実を見取るとともに、そこから人間にとって美術制作がどのような営みであるのかを明らかにしようとするものである。

一般的に障害児者による美術表現はアール・ブリュットやアウトサイダー・アートなどとして、ファインアートと呼ばれる美術とは異なるものとして理解されることが多い。しかし、本論文では、病気や障害をもつ子どもの美術表現をアール・ブリュットやアウトサイダーアートではなく、ファインアートという概念が生まれる以前からの美術の歴史に連なるものとして理解していった。

本論文の理論的前提となる先行研究としては Arts-Based-Research (ABR) と呼ばれる、芸術に依拠した研究という考え方がある。本論文の執筆を進める私自身の制作経験や他のアーティストによる研究を参照しながら、重い病気や障害をもつ子どもたちの美術制作をアーティストによる美術制作と本質的には同様のものとして読み解いていった。

また、インターセクショナリティ、矢野智司による「二重メディア身体」論という概念によって障害に起因するものばかりではない子どもたちが生きる複雑な現実や、他者が介在する美術制作の在り様を捉えようとした。

研究手法としては、現象学の手法を用いた。メルロ＝ポンティによる身体論的現象学を採用し、子どもたちの美術制作、また、そこに関わる教員の身体との関わり、また、身体と物質との関わりの中かで何が起きているのかに注目をした。また、フッサールによる現象学の手法を採用し、私自身がこれまでに身につけてきたものの見方、考え方を括弧に入れ、臆見を外し、事象そのものに迫ることで何が見えるのかについて注目をした。

院内学級の子どもたちの美術制作については、筋ジストロフィーの子どもたち、筋疾患の総称としてのミオパチーの子どもたち、脳性まひによる、重症心身障害児と呼ばれる知的にも身体的にも重度の障害をもつ子どもたち、入院が一年以内の短期入院の子どもたちに注目をし、それぞれの固有の身体と素材や画材等の間からどのような表現が導き出されているのかについて述べた。

例えば、筋ジストロフィーの子どもたちは筋力が弱く、身体の可動域も小さい。一般的にはそれらの特性は美術制作を行ううえで不利になるものと考えられるが、例えば、筋力が弱いために鉛筆で描くことが難しい場合、描くのに筋力を要さず、少しの力で線の強弱をつけることが出来る筆ペンを用いて描くなど、子どもたちは筋力の弱さや可動域の小ささを画材の選択によって補っていた。また、消して描き直すことの出来ない画材を用いることは、子どもたちが描きたい形を選び取り、慎重に描くことにもつながっていた。そして子どもたちは自分が行いたいと考える制作方法を自ら選び取り、どうすれば自身の身体をもって、その制作方法で表現を行うことが出来るかを試行錯誤するなかで、新たな表現方法を編み出

していった。

また、自身では手を動かすことが出来ず、口頭での指示による教員の介助を受けて美術制作を行うミオパチーの子どもは、画材や素材の性質と、介助をする教員の知識や技能などを自らの美術制作の重要な要素として、その条件のなかでどのようにすれば美術制作を成立させることが出来るかという探究の上に、自らの制作方法を見出していった。

そしてそれらの子どもたちは、ただ作品を作り出すことに留まらず、絵を描くという行為を通して、描くために何を見るか、どこへ行くかなどを考え、病院のなかで完結していた生活を変容させていった。病気や障害をもつ子どもたちの美術制作は、それぞれの身体固有の特性や、それぞれの子どもがそれまでに何を経験し、どのように思考し、その先をどのように生きていこうとするかと密接に関わっていた。

本論文の副題である「病気や障害をもつ子どもたちの生と美術制作における探究」は、そのような、子どもたち一人一人の生と分かち難い美術制作における探究を表している。ここで言う生は、ただ身体が生存しているということではなく、外界や人類の歴史と接続しながらどのように豊かな生を生きるかということである。

本論文は、多様な病気や障害をもつ子どもたちの、それぞれに固有の身体と外界との関わりのなかで起こっていることをひとつひとつ見取ることによって、どのような人間の美術制作においても生起しているはずの人間の生成変容について理解するものである。そしてそこに関わった教員の立場から、子どもたちの制作のただなかにおいて、自身がどのように変容していったかについても述べていくことによって、子どもと教員が生成変容を繰り返す美術教育の姿を明らかにした。

審査結果の要旨

本研究は、申請者が院内学級に身を置く子どもたちの美術制作をめぐる探究に美術教育実践者の立場で並走した体験の記録と省察を現象学的に深めたものである。院内学級の子供たちとの体験という一般的にアクセスしにくい場を題材とし過去の体験を咀嚼しつつ考察したスタイルからアートベース・リサーチとしても特異な価値を持っている。

特に4章から8章までの情報、分析は極めてリアルである。申請者自身の気づき、苦悩、成長が、子どもたちの生きる力を獲得するという意味での成長と共振している姿の描写はまさに副題である「探究に並走して」いたからこそ可能であったと考える。

最終試験においても、口頭試問において今後の申請者に託された方向性の自覚が明確であった。

以上のことから審査委員は全員一致で本論文を博士論文として合格と判断した。

審査員の審査評を以下に示す。

(主査 渡邊誠介)

本論文は、病気や障害と向き合っている子どもたちの院内学級における美術教育の実践が、如何に当該の子どもたちに生きる力を学びとらせ、あわせて彼ら彼女らと並走する美術教員である筆者の努力、思い込みとその気づきからの葛藤、そして研究へと昇華していくかを詳細に記述したアートベース・リサーチである。

記憶・記録をさかのぼって、分析、考察するスタイルは、一般的な研究論文では希少であるが、まさに当該分野の研究が極めてデリケートであり、かつ筆者が挑戦し体験してきたことを自身の中で消化し、本論文という作品に還元するアートベース・リサーチ的時空の中では必要とされたスタイルであると考ええる。

本研究は、その研究テーマとしての希少価値、方法論を含めた論文スタイルの独自性などから極めて価値の高いものであると考える。

(副査 北雄介)

院内学級での6年間の自らの教育実践を顧みながら、子どもたちと申請者自身とが、ともに美術制作、そして自らの生に対して探究を深める過程を丁寧に記述し、また分析した労作である。院内学級における美術教育というアクセスが難しい題材を扱ったこともさることながら、以下の3つ観点から、学術的・実践的価値の高い研究であると考ええる。

- ① 院内学級における、障害をもつ子どもたちへの美術教育の実践的方法論としての価値（素材や画材の選び方、探究の進め方、外の社会とのかかわり方など）
- ② より広い意味での、教育方法論としての価値（子どもへの向き合い方や、教育・学習と生とが不可分であるという主張については、障害のない子どもや、美術分野以外の教科の教育においても有効だと思われる）

③ 美術教育研究の方法論を問い直す、学術的価値（教育者・研究者・アーティストという立場を横断することや、現象学的還元、アートベース・リサーチなどの有効性）

このような複層的な狙いをもち、かつそれが達成されていることが、学位論文に相応しいスケールの大きさを本研究にもたらしめている。

（副査 小松佳代子）

本論文は、院内学級において申請者が教員として実践してきた美術教育の意味を、アーティストとしての自らの実践感覚を動員しつつ読み解くものである。重い障害や病気に向き合う子どもたちが、発表者と関わりのなかで美術制作をしてきた実際の様子と、美術制作が子どもにとって生きるうえでの重要な探究であることが省察される。教育実践の記録でありつつ、障害児・者の置かれている現状、美術教育の課題、ひいては人間と美術との関わりという普遍的な問題まで視野に入れて論じている。先行研究のほとんどない院内学級の美術教育について具体的に論じた貴重な研究である。

病気や障害のために、ほぼ一生を病院内で過ごす子どもたち、あるいは病気による急激な身体の変化にさらされる子どもたちが、自らの望む表現を実現するために、素材や道具を工夫して探究する姿を、教員として研究者としてアーティストとして見取り丁寧に記述している。病気ゆえにできないことが増えていく子どもの苦しみに向き合う教員としての葛藤にまで踏み込んで、現在の美術教育のみならず、「発達」を目指す教育概念そのものへの問い直しにまで迫っている。事実の重みと、医療と教育にわたりさまざまな困難のある現場での実践を省察し、「現象学的還元」によって、申請者自身が知らず知らずに身につけてしまっていた考えを問い直すなかで、アーティストとしての目線で子どもたちの美術制作を自らの制作実践と同様の探究に貫かれたものと位置づける。

先行研究の渉猟、研究方法論の明示、実践記録としての重み、それに対する精緻な省察、そこから見いだされた課題の提示において優れた論文として評価する。

（副査 池田吏志）

本論文は、院内学級に在籍する子ども達の描画活動について、変化していく身体の中なかで作品制作が彼ら／彼女らの生にどのような位置づけとして営まれていくか、そのありようが描出されている。また、そこに関わる筆者も、単に支援を検討・提供する存在のみならず、時に悩み、葛藤しながら、その生に寄り添い、先生と生徒という関係を超えて共に探究する存在として描かれている。

本論文では、方法論として現象学的手法が用いられ、アーティスト、教育者、研究者の複数の側面を持ち、様々な経験を経た筆者が院内学級での自身の実践をふりかえり、遡行することで事後的にしか分かりえなかったこと、当時は言葉にできなかったことが省察的に記述されている。筆者の主観や省察と共に語られる研究手法は、実証的研究とは異なる、筆者と対象者との抜き差しならない場や空間、関係の緊張感を私達に迫体験させ、院内学級とい

う、一般的には、アクセスし難い世界の質を論理的・感情的に理解することを助ける。障害児を対象とした美術教育の博士論文はこれまでいくつか存在するが、本論文の対象、方法を用いたアプローチは行われておらず、独自性があり、当該分野の今後の発展に大きく寄与することが期待される。このことから、博士の学位を授与される十分な資格があるものと考え